国民国家論より

はじめに
1、 9・11 事件とパレスチナ
2、 個人としての文化
3、 二分化の孕む危険性
4、国民国家論の可能性
おわりに

東南アジア過程フィリピン語科　2 年　榎田真浩

はじめに

私の身の周りでは現在、「オガワナイゼーション」という言葉が流行っている。これは文字通り「小川化」を意味する。そして、私に国民国家論への道標を提供してくださった東京外国語大学東南アジア課程にてフィリピン地域基礎Ｉを指導してくださっている小川英文先生の名前を元に創られた言葉である。彼は本来考古学者であるが、「日本考古学会」の体制そのものに問題点を見出し、現在の日本考古学会のあり方を試行錯誤しているといういわば、「脱・日本考古学会」を真剣に考える先駆者というわけである。

彼のエピソードのなかに次のようなものがある。彼は某考古学研究発表会にて自分のフィリピンにおける調査記録を発表したところ、ニュージーランド出身のある著名な方が彼の発表に大変興味を示し、同出席者に彼の名前を尋ねていたという。これを偶然目の当たりにした彼は、フィリピンという隣の家の庭を断りもなく掘り起こし、そこに発見したものでなぜか自分が権威を得ようとしているという大きな矛盾に遭遇したという。彼はそこに漠然としたナショナル・アイデンティティを感じたのではないかと私は考える。

「日本」という国から「フィリピン」という土地を訪れ、土地を掘り起こし、見つけたもので甘い蜜を吸う。これは考古学者のみならず歴史学者や多くの学問分野に携わる研究者が陥っている「学問の罠」ではないだろうか。そのそこなし沼ともいうべき「罠」にどっぷり浸かってしまうと上高森遺跡での捏造事件などに帰依するのである。そもそも、学問というものは何のためにあるのだろうか。決して私腹を肥やすためではないと主張する者も多いかと思うが、結果的にそうなってはいないだろうか。

「学問」には先人たちが長年の研究を重ね、積み上げてきたものがあり、それ自体に「歴史」が存在するのは事実である。しかし我々は、その積み上げられ構築された建物にそのまま上がりこんではいないだろうか。科学技術や医学の世界では、「まず常識を疑ってみる」という言葉が存在するが、これは何もこれらの分野に限ったことではなく、すべての学問分野、及び事象に当てはまるのである。小川英文がふとしたことをきっかけに「アイデンティティ」と向き合ったように、すべての研究者は既成の建造物にただ入門するのではなく、いったんそこを離れ自己と向き合い場合によってはその体制をぶち壊す必要があるのではないか。よく、学問を装飾するかのごとく「国家のため」、「国民のため」という安易な表現も使われるが、それは本当にその名の通りなのだろうか。そもそも「国家」、「国民」とは一体何なのであろうか。私は以前宗教を考えるとき人間の帰属意識に着目したことがあった。人間は誰しも弱い生き物で、頼るべき「絶対的存在」を求めようとする。そのような脆弱な人間の「絶対的存在」として、「神」たる虚像物を創造するのではないかと思ったのであるが、一方で「アイデンティティ」の帰属するところは一体どこで、それは何なのかという疑問も感じた。

国民国家論とは、小さく区切った枠組みのなかでプレーするのではなく、多くの学問に共通し、その根底にあるものを手探りしていく論である。だから、文学、歴史学、宗教学、考古学、文化人類学など多くの分野の事象について考えていくことができるのである。本稿ではまだ国民国家論について駆け出しの段階である私が国民国家論を意識して、アメリカのあり方や「文化」について考えてみた。

1、9・11 事件とパレスチナ

2002 年、中国で北朝鮮朝鮮民主主義人民共和国出身の一家族が日本大使館に亡命をはかった。その事件後、メディアでは中国人警察官の領事館内への侵入をなぜ黙殺したかなど日本の対応の仕方に問題が集中していたが、私はもし捕らえられれば死が待っているといういわば命がけのことまでしてな

ぜそこまで自分が生まれ育った国を捨てるのだろうかと考えた。誰であれ、自分の生まれ育った土地には愛着を感じるものである。しかしそういう次元のものをはるかに越え死を覚悟してまで彼らに「亡命」を決断させたものは一体何だったのであろうか。

私はあれは「亡命」だったのではなく、「追放」だったのではないかと思う。そう、彼らは自ずから亡命をはかったというよりもむしろ、「亡命」をはからなければならない状況に追い込まれていたのだ。「亡命」のことについて言及するならば、やはり「パレスチナ問題」について考える必要がある。第二次世界大戦後に世界各地で起こった大規模な領土再編成により、大きな人口変動が起こった。たとえばインドのムスリムは 1947 年のインド＝パキスタン分離後パキスタンに移り住むようになるし、パレスチナ人はイスラエル建国のさなか、ヨーロッパやアジア、ロシアからのユダヤ人受け入れ地域確保のために大規模な離散を余儀なくされる。そして次にこうした変動によって異種混沌とした政治体制が生まれる。イスラエルの政治生活のなかには、ユダヤ人ディアスポラ解消政策とからみあいながら、またそれと競合しながら、パレスチナ人追放政策が存在している。

抑圧され続けてきたユダヤ人がアメリカの戦略的資産としてイスラエルという国をつくり、パレスチナ人を現在圧倒的な経済力と武力によって抑圧しているという時代錯誤はさておき、地を追われたパレスチナ人は自分を何人と名のるのか。そもそも「パレスチナ人」とはもともと存在したのではなくヨーロッパ諸国の後押しでシオニストユダヤ人がこの地に強引にイスラエル国家を作ったことにあるのだ。それまで「パレスチナ人」という民族がそこにいたわけではない。イスラエル建国によって土地を奪われ追放された人々が、住むところのない「難民」として締め出されることになり、それが「パレスチナ人」と呼ばれるようになったのである。彼らに「国家」はない。だから、彼らの主張を合法化し実現する権力はなく、生存権さえ含めてその権利は保障されていない。当然パレスチナ人はイスラエルに敵対するが、国家に対する民衆の戦い、つまり始めから「非対称的」でかつ、「非合法」の戦いになる。

この抗争に関して、国連は何度もイスラエルの一方的な行動に非難決議をだそうとしたが、そのたびにアメリカの拒否権によって打ち消されてきた。しかし、アメリカにとってそれは道理である。なぜなら 9・11 事件のアメリカの対応を見れば一目瞭然だからである。私は野球部の合宿で福島にいたときに、偶然テレビでその一部始終を目撃したのだが、はっきり言って、そこまで大きな衝撃はなかった（練習で疲れ果てていたのもあるかもしれないが）。なぜなら、その文明の衝突なるものは、ただ小規模であったというだけで「パレスチナ問題」に大きく類似していると感じたからだ。アメリカ＝イスラエル、極反米＝パレスチナ。

私がなぜこの構図に至ったかというと、アルカイダが 9・11 テロ事件の犯人だとすると、非政府組織が大国にテロを武器に戦いを挑んだという共通点があるからである。アメリカがイスラエル建国に献身的であったのは、アメリカの中東域への介入の足がかり、つまり戦略的資産であったことはすでに紹介したが、首謀者ビンラディンは 1991 年の湾岸戦争終了を機に、サダム・フセインによるイラクの脅威に対抗するためのアメリカ軍のサウジアラビア駐留に憎悪を抱いている。これは、1996 年、サウジアラビアに駐留するアメリカ軍にジハード宣言を出したことからも明らかである。イスラムの聖地を異教徒が占領しているとビンラディンは捉えているのである。

アメリカを超大国たらしめる三つの要素として、朝日新聞の田岡俊次氏は 3 M を掲げている。Money（経済）, Military（軍事）, Media（メディア）である。私がこの 3 つの M のなかで最も危惧すべきものだと思うのは、Media（メディア）である。メディアはほかの二つの M とは異なり、他国に圧倒的影響力をもつからである。9・11 事件をテレビで見て、歓喜あふれる中東の一般市民を世界中に報道

し、やはり「悲」と「楽」の二分化を図ったのもアメリカである。ただ、あの映像は政治的意図により作成されたとの批判の声も高い。つまり、私がここで言いたいことは、私たちはマスメディアによって大きくコントロールされている可能性があるということだ。お金も軍事もない弱者にメディアによる戦略は難しい。よって、対極にある大国に思うように「悪」とされてしまうのである。これはまさに「知的植民地主義」の一端である。

パレスチナ人にとっても、またビンラディンにとっても聖地を異教徒に侵されていることには変わりないのである。まさに、アメリカ＝イスラエルは「現代の十字軍」である。

2、個人としての文化

異文化コミュニケーションというと実にいい響きだが、それを受け入れるか受け入れないか、あるいは受け入れられないか以前の問題として、「異文化理解」が最低条件となる。先進国だから、とか、後進国だからといかいったなんとも無責任な理由で否定されてはあんまりである。食わず嫌いを当てはめていい領域ではない。ここでは、近年うるさいほど叫ばれている「異文化コミュニケーション」の最小構成要素、「文化」について考えてみたいと思う。

青木保は、文化におけるコミュニケーションについて三つのレヴェルがあると述べている。一つは、自然のレヴェル。これは人間の本能的な部分で（例えば、おなかがすけばご飯を食べる、など）世界のどこへ行っても変わらない行為。二つ目の段階は、社会的なレヴェル。これは右側通行か左側通行かや、食事を取るとき、ナイフやフォークを使うのか、箸を使うのかなど、どの社会に行っても一つの社会で培った常識的なことが取得できれば、ある程度はこなせるレヴェル。三つ目は、「象徴」のレヴェル。文化的な中心部のことで外部のものには最も理解しづらいところ（例えば、異教徒にとっての十字架の重要性、日の丸が日本の象徴である理由）。青木保は実にわかりやすく枠組みを設けることに成功しているように思えるが、それはあくまでも「一見して」のレヴェルである。なぜなら、枠組みが大きすぎるからである。こんな大きい枠組みで文化など理解できるわけがない。これは言い換えれば、理解できること、理解できないこと、の二分化を「1・2 と 3」ではかっただけである。大体、「常識」が社会によって全く異なるのにどうやって「ある程度」こなせるのか。「ある程度」とは何を基準にし、「どの程度」なのか。「程度」こそ「社会」によって違うのではないか。「常識的なこと」が理解できない人には異文化理解は不可能なのか。私は、こういった文化の優劣、すなわちランクづけにつながりかねない発想を危惧している。

私は文化とは個人に帰依するものだと考えている。ここで坂口安吾の、「日本文化私観」の一説を引用させて頂く。

「叱る母もなく怒る女母もないけれども、家に帰ると叱られてしまう。人は孤独で、誰に気兼ねのいらない生活の中でも、決して自由ではないのである。そうして、文学は、こういうところから生まれてくるのだ、と僕は思っている。」（西川長夫、2001「国境の越え方、p345」）

西川長夫はここに日本文化論のもっとも重要な主張がここにあると考えている。安吾は一つの個としての人間が、自分自身、すなわち「生存それ自体が孕んでいる絶対の孤独」に直面すべき場所としての家について語っているのである。また、西川長夫は以下のように続けている。

「特定の集団の習俗や心性について語る文化論が本来的に持ち込んでいる欺瞞やうさんくささを、安吾は「文学のふるさと」から突いているのだ。文化とは究極的には伝統や国民性の問題ではなく、個々人の「絶対的孤独」に根を下した個々人の問題ではなかったのか。」（同上）

西川長夫は「文化とは個々人の問題である」としており、私は全くもってこれに賛成なのであ

る。「文化」というと、いかにも「国民」や「民族」が共有して持っているものというニュアンスが強いが、ほとんどの場合具体的な「国民」、「民族」の区分もないわけだし、たとえ同じ社会に生存したとしても、圧倒的な抑圧がない限り主義、思想の統一などもありえない（あったらあったで非常に恐ろしいことだが）。

混血の人はどちらの民族に所属するのか。国籍は「日本人」だとしても、人生の大半を別の土地で過ごした人は本当に「日本人」なのか。また当人はそう望むのか。私にはそうは思えない。

「十人十色」、「千差万別」、など昔ながらの諺からもわかるように、私たちの先祖たちも身分などとは別に、個々人の違いははっきりと意識していたと私は思う。これを言い換えれば、「十人いれば十通りの文化が存在する」、「万物はそれ相応の文化を有する」となるのは飛躍しすぎだろうか。

3、二分化の孕む危険性

ブッシュ大統領は 9・11 事件後、これを「文明対野蛮」、「正義対悪」などの二分化をはかる言動を用いて米国民（？）の愛国心に火をつけた。戦争をしようとしたアメリカにとっては、こうやって過去幾千もの戦争のなかで用いられた「敵対味方」の構図を構築したのはそれでいいのかもしれないが私は二分化というのは実に危険を孕んだ恐ろしいことであると考えている。

身近なところから例をあげると、いじめではないだろうか。第三者から見ればどちらにも非がある場合が多いが、人数や力で勝る団体がそうではない小さな団体、または一個人を徹底的に攻撃し、時には死へと追いやる。これも二分化「弱者対強者」の二分化である。

私が最近よく思うのは、資本主義と共産主義とはどう違うのかという点である。ソ連の解体に伴い、資本主義が共産主義に「勝った」とされているが、1990 年代の世界の動向を見てみて、経済的、あるいは火器をもちいない「平和」はおとずれたのか。否、世界に平和などおとずれてはいない。共産主義は確かに、その性格と政策に破綻をきたしソ連は解体、中国も政策の転換をせまられるようになった訳だが、それと同様に、今世界は「世界的共産主義の転換期」ではないだろうか。共産主義の下では、上層階級の人々は私腹を肥やし、下層民は貧困生活を強いられるという「平等」というイデオロギーとは相矛盾する現実を露呈した。それと似た状況が現代に見て取れる。「資本主義」を掲げる国が、どの国も「平等」に経済的に「富国」となるチャンスを与えられているとしながら、自国の利潤を第一に考え下層国に建前外交の資金援助を行う。そして自国のイデオロギーにそぐわない国、あるいは人民を経済封鎖や火器を持って抑圧する。ここに私は共産主義がかつて国家の理想実現の下行ったことと大した差異を感じないのである。この現代の腐敗し、限界に迫ってきた世界に光明を与えるものとして私は「グローバリズム」にその可能性を見出したい。

「グローバリズム」は「地球化」と日本語訳されるのが一般的だと思われる。しかし、いざふたを開けてみるとそれは「アメリカナイゼーション」そのものである。そこで少々長いが西川長夫の一説を引用させていただく。

「とりわけ日本にいて強く感じ取られるグローバリゼーションの圧倒的なイデオロギーの力に抗して、グローバリゼーションの本質を見極めるためには、そのイデオロギーの発信地であるアメリカ合衆国やイギリスやドイツやフランスや日本といった、中核にある覇権国やその近辺の国々ではなくグローバリゼーションが及ぶ末端の周辺の地域から考察を続ける必要があることを強調しておきたい。タイやバングラディッシュやボリビアやメキシコや南アフリカ等々の周辺でグローバリゼーションの結果として何が起こっているか、あるいは何が起こっていないかを考察することが、われわれにグローバリゼーションに対する正しい判断をもたらすだろう。グローバリゼーションの大きな欺瞞の一つは、

グローバル化の名の下にアメリカ化が進行し、世界の不平等化と断片化が進められていることだろう。それはかつて「国民化」の名の下に国民と均質化と平等ではなく、階層化と差別が進められたことを思わせる」（西川長夫、2001「国境の越え方、ｐ392」）

私は「マルチカルチュラリズム」の先に「グローバリズム」があると考えているのだが、私が可能性を見出したい「グローバリズム」とはもちろんこのようなものではない。「グローバリズム」には多くの批判の声があり、それは「グローバリズム」の改善点として無視するわけにはいかない。一言語・一民族・一宗教・一文化の国家の国民操作に便利なイデオロギーではなく、もっと柔軟な、たとえばオーストラリアが白豪主義を転換したことや南アフリカが人種隔離政策を撤廃したことにそのファーストステップがある気がする。そういった国民操作の難易度にも逆説的な理想があるのではないだろうか。

4、国民国家論の可能性

個人的なことだが、国民国家論を大成させたもの、またそれを忠実に体現化させたものには、ノーベル賞を授与していいのではないかと考えている。なぜなら、国民国家論を追及させた先には、近現代に存在する「国家」そのものとは全く異なった「それ」が創造されるはずだからである。「そこ」に、政府は存在するのか、犯罪がないのかなど具体的なことは何一つとして現段階で言及できないのは非常に残念だが、私は「そこ」に近代国家が抱える諸問題を打破する新しい「何か」があると信じている。

おわりに

「おまえは何人だ」質問されて、「地球人だ」と答えるのはあまりにも安易で笑われるかもしれない。しかし、「地球人だ」と当然のごとく答えられる社会、つまり「おまえは何人だ」という質問が存在しない世の中を想像してみると「アイデンティティ」という言葉がそこに存在するのかを考えてみるのも実におもしろい。私は、既存の近代国家を取り壊して一からいろいろ模索できる国民国家論に魅了されているわけだが、歴史の浅いこの「学問」に答えたるものはもちろん存在しないし、この分野に魅せられた学者が手探りで模索しているわけだが、今のままでは批判のみ行い、それに代わるものは何もない。この多くの人々の目前にある濃く厚い霧が晴れたとき、新しい「何か」が見えるはずである。その新しい「何か」を発見するためにもひとりでも多くの人に「オガワナイゼーション」をはかってほしいものである。

文献目録

青木保

2001　『異文化理解』　岩波新書

サイード・E.W

1993　『オリエンタリズム』　訳今沢紀子　平凡社

サイード・E.W

1998　『知識人とは何か』　訳大橋洋一　平凡社

蓮見重彦　山内昌之

1994　『いま、なぜ民族か』　東京大学出版会

ハンチントン・サミュエル

2000　『文明の衝突と 21 世紀の日本』　訳鈴木主税　集英社

藤原帰一

2002　『テロ後、世界はどう変わったか』　岩波書店

高橋和夫

2001　『アメリカとパレスチナ問題』　角川書店

西川長夫

1998　『国民国家論の射程』　柏書房

2001　『国境の越え方』　平凡社

2002　『戦争の世紀を越えて』　平凡社